

「教える」活動に挑戦する人文社会学部生

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 三浦 哲司

一 「教える」ことの意味

大学教育の現場では現在、アクティブ・ラーニングの導入が求められるようになってきている。本学でも図書館や二号館にアクティブ・ラーニング専用のスペースが設置

され、さまざまな授業において魅力ある試みが始まっている。筆者自身も専門教育科目や教養教育科目の授業において、グループワークやワークショップを取り入れ、学生同士の学び合いを重視しながら授業を展開している。

いうまでもなく、アクティブ・ラーニングするのは学生であり、教員にはそうした学生の姿勢を引き出す工夫が求められる。同時に、「授業で主体的に学んで終わり」ではなく、場合によってはさらに一歩踏み込んだ取り組みも必要となろう。そこで、教育的効果が高いと思われるのが「教わる」と「教える」の有機的な結合である。換

言するならば、授業で学んだ内容を誰かに教え、その過程で気づいたことをさらに学ぶというサイクルを、いかにして構築していくかが問われるといえよう。

すでにオープンキャンパスの公開ゼミで、学生が受験生に対して講義を担当するなどの試みは看取される。ただ、そうした機会以外でも、授業やゼミでの学びを基盤に、何らかの「教える」活動を展開することで、学生の教育的効果はいっそう高まるのではないか。

こうした問題意識から、人文社会学部の学生による将来的な「教える」活動の拡充を展望して、本稿では二〇一八年度に取り組んだ学生による「教える」活動を紹介してみたい。なお、筆者は行政学・地方自治論の研究者であり、将来的には「地方自治教育学」の研究および普及をめざしたいと考えている。ただし、現時点では着手できていない。そのため、本稿は教

育学の専門家ではない者が書いたレポートである点に、あらかじめ留意されたい。

二 二〇一八年度の学生による

「教える」活動

二〇一八年度に東海地区において、筆者が関わった人文社会学部の学生による「教える」活動は、大きく以下の三つがある。第一は、筆者の三年ゼミ学生による、御剣学区女性会のメンバーを対象とした「教える」活動である。御

剣学区と本学とは、山の畑（はたけ）プロジェクトをはじめとするさまざまな機会に連携活動を進めてきた経緯がある。こうした御剣学区で活動する女性会は、これまで御剣コミュニティセンターや市内各所において、定期的に学習会を開催してきた。今年度は名古屋市教育委員会から女性学習活動の研究委託を受け、この枠組みの一

部で名古屋市立大学との教育連携プログラムを実践することになった。このうちの一回を、筆者の三年ゼミ学生が担当している。

六月一四日の午後、御剣コミュニティセンターにおいて、御剣学区女性会のメンバー約二〇人に対して、ゼミ学生が「市バスの入り口・まちを走る青いバス、ちよつと覗いてみませんか？」というテーマで一時間ほど講義を担当し、その後に質疑応答が行なわれた。担当した学生からは、「人前で話すことは慣れているが、地域の方々、しかも女性ばかりにしてお話するのは初めての経験で新鮮だった。『どのようにすれば飽きずに聞いてもらえるか』を意



市バスに関する講義の様子

識し、できるだけ具体例を交えながら話をするように準備をし、結果として上手くいったように思う」という感想が聞かれた。参加した女性のメンバーからも好評で、当日の様子は御剣学区の広報誌でも紹介されている。

第二は、筆者が担当した基礎演習の履修学生二名（一年生）による、東海市・大府市・知多市の市議会議員および市役所幹部職員約一〇〇名に対する「教える」活動である。筆者はこれまで、東海市・大府市・知多市とは各種の審議会や職員研修、講演会などにならず接点を持ってきた経緯がある。こうしたなかで、毎年開催される「知多北部議長会議員研修会」において、「若者によるまちづくり」というテーマで講演依頼を受けた。ただし、与えられた二時間を筆者の講演のみで終えるのではなく、テーマに沿って若者自身の声をじかに聞いてもらう場にしたと考えた。そこで、あえて一八歳の一年生二名を登壇させ、それぞれに自らが取り組んでいるまちづくり活動について報告を委ねることにしたのである。

八月八日の午後、知多市勤労文化会館において研修会が開催され、筆者の講演ののちに二人が

二〇分ずつ報告した。そのなかでは、まちづくり活動に参加した契機、これまでの活動の成果と課題、今後に挑戦したい内容などを講演し、参加者からの質疑にも応答している。この二人からは、「参加者が最後まで熱心に聞いてくれたうえ、発表後には個別に話もでき、貴重な機会となった」「温かい励ましの言葉ももらい、これからの活動の励みになった」といった感想が寄せられた。この研修会の様子は、毎日新聞社のサイト(⑤)大学・大学倶楽部)でも確認することができる。



研修会で発言する学生の様子

第三は、筆者の四年ゼミ学生による、名古屋大谷高校の三年生の約六〇〇人に対する「教える」活

動である。筆者の四年ゼミでは昨年度より、「大学生による主権者教育」をテーマに活動し、名古屋市内の複数の高校に向向いて選挙出前トークを担当してきた。こうした活動の積み重ねの甲斐もあり、二〇一八年三月には明るい選挙推進協会より、優良活動賞の表彰を受けている。一連の活動のなかでは、以前より名古屋大谷高校とも接点があり、主権者教育の担当教諭からの依頼を受け、筆者の四年ゼミ学生が四〇分程度で選挙出前トークを担当することになった。

一〇月一日の午後、名古屋大谷高校の体育館で選挙出前トークを開催している。当日は、四年ゼミ学生が持ち時間のなかで、選挙と日常生活の関わり、若者が選挙に行く重要性、選挙に関するしくみの確認(クイズ形式)といった内容で講義を担当した。参加した高校生は、多くが真剣に話を聞き、クイズにも積極的に参加しており、担当教諭からも「年齢の近い大学生が話をすると、生徒たちの反応が日ごろとはちがったものになり有益な機会となった」との声が聞かれた。他方で、講義を担当した学生からは、「これまでも別の高校で選挙出前トークを担当してきたが、生徒たちの学年など

に応じて内容を調整する必要があり、「聞き手」の立場に立って準備する重要性を再認識した」などの感想があった。

ともあれ、二〇一八年度はどのように学生による三つの「教える」活動を展開してきた。参加者の反応を見る限りでは、参加者にとっていずれも有益な機会となり、また何よりも学生自身の「学びの深化」につながったように思われる。いつもの大学の教室とは異なる環境で、同じ大学生とは異なる人々に対して「教える」活動を担うことで新たな気づきや発見があり、ひとつの経験として彼らなりに蓄積されたといえよう。

三 まとめにかえて

「教える」活動のこれから

ここまで見てきたように、学生による「教える」活動には、いくつかの意義と可能性を見出すことができる。ここでは、以下の二点に触れておきたい。

第一は、「学生が緊張感を持って入念に準備する過程は深い学びにつながる」という点である。大学の授業でも発表の機会は多々あり、時間をかけてしっかりと準備する学生もいれば、そうではない

学生も見られる。背景には、「発表する相手と一緒に授業を受けている友人だから、多少の失敗をしても恥ずかしくない」という気のゆるみがあるのかもしれない。他方で、上記の取り組みのように、大学外の人々に対して講義を担当するとなれば、当然ながら失敗は許されず、あらゆる質問にも返答できるように、学生も緊張感を持って入念に準備せざるをえなくなる。大学の授業で「教わる」ことも重要であるが、他者に「教える」ために自ら学ぶことも、同程度に重要といえる。

第二は、「教える」活動から新たな交流が始まる」という点である。たとえば、御剣学区で講演した学生は、その後も継続的に山の畑（はたけ）プロジェクトに参加し、市大祭での出店や「御剣学区と名市大生とのおしゃべり茶話会」にも積極的に参加している。同様に、議員研修を担当した学生は、この研修がきっかけとなって議員と接点が生まれ、実際に自身のまちづくり活動を波及させる動きを生んでいる。このように、「教える」活動には、学生自身の気づきや学び、経験の蓄積に加えて、新たな人間関係の形成という可能性も有しているように思われる。

他方で、「教える」活動を広げていくうえで課題もある。それは、「大学での授業やゼミと、『教える』活動とのいかにして連動させていくか」である。上記の三つの活動のうち、実は大学の授業やゼミと関連づいているのは、選挙出前トークのみである。それ以外の活動は、学生が大学の外において個人で取り組んでいる内容が中心となる。「教わる」活動から「教える」活動へと結びつけ、そこで気づきや発見を次の学びにつなげていくためには、「教わる」活動と「教える」活動とが有機的に結合するながれをどのように作っていくかが課題となる。

いずれにしろ、大学での学びを基盤に、大学外の人々に対して「教える」活動の機会をどのように設定するかが、教員側には求められるといえよう。「教える」活動の実践は未だ発展途上ではあるが、来年度以降も継続して取り組み、学生一人ひとりの学習効果を高めていきたいと思う。